

食べる力は生きる力の源

鹿児島 むぎのめ子ども発達支援センターりんく

岩松まきえ

むぎのめ子ども発達支援センターりんく（福祉型児童発達支援センター）、1日利用定員20名）は、前身の「鹿児島子ども療育センター」が2017年4月に新築移転する際に現在の名称となりました。無認可時代から生活とあそびを柱に実践を展開し、「食べることは生きること」と実践の中に給食を位置づけています。

現在、自主事業の赤ちゃん教室（月2回・生後3ヵ月頃から）・親子療育グループ（週2日・1〜3歳頃まで）・3つの小集団グループ（基本毎日通園・2歳頃〜就学前まで）と、5つのグループに31名の子どもが在籍しています。

偏食がある子や食べることにしんどさを感じている子、食べムラや歩き食べがある子、離乳食がうまくすすまず、親は「食べさせなければ」という思いにとら

われ、楽しい親子の食事の経験ができにくかった子など、親子によって抱えている困り感はさまざまです。

どの子にとっても1日3度の食事の時間がつらいものではなく、「おいしいね」という共感の響き合いや「おいしかった」「お腹いっぱい」といった満足感など、安心して楽しい時間になってほしいと願っています。そのためには、子どもの24時間を保護者と共有し、「お腹がすいた」をしっかり感じられる生活リズムづくりと、「もう1回！ もう1回！」と遊びを楽しむこと、そして、思いを伝えたいような大人や友だちとの関係づくりと、子ども自身が外界とのかわりを抜げていくことも大切に、「食べてみたいなあ」の思いがふくらむようさまざまな工夫をしています。

「発達を食へる」
「喜びと感動の離乳食を」

赤ちゃんにとって、母乳やミルクはもちろん、スプーンひとつとっても初めての出会いです。離乳食を育児書通りにすすめようと向き合っただけだと、うまくいかないと悩むお母さんたちの声から、赤ちゃん教室で離乳食教室をはじめました。「離乳食を始める時は月齢で考えず、家族が食べる姿を見てよだれが出たり、口をもぐもぐしたり、手を伸ばしたりと子どもの心と身体の準備ができるのを楽しみに待ちましょう」また、「見て、においをかいで」からいていねいに、赤ちゃんと離乳食の出会いを笑顔ですすめましょう」と話しています。「食べない、どうしよう」ではなく、子どもがひとつひとつ食材を取り込み、世界を抜げていくことへの感動や喜びのなかで、それぞれの親子が食事の楽しさを感じ合う時間となるようにとりくんでいます。

子どもからの「食べてみたいなあ」を大切に

「食べる」には、「目で（見て）食べる」「鼻で（においをかいで）食べる」「さわ